

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(26)

中村周平

日本では、スポーツにおける事故というリスクを事故被災者と事故関係者（所属チームや学校側）のどちらか一方、もしくは双方がその責任を負うという現状によって様々な弊害が生じています。ところが、ニュージーランドやオーストラリアといったスポーツ先進国においては、「リスクを分散させる」という仕組みによって対応していることが研究を進めていくうえで明らかとなりました。その事実を知ったとき、私自身、衝撃を受けましたが、さらに研究を進めていく中で、この「リスクを分散させる」ことで得られるメリットに大きな感銘を受けました。そして、そのメリットこそがスポーツ、とりわけラグビーのようなコンタクトスポーツが向き合わなければならない「不可避的」な事故において到達すべき一つの答えではないかと考えるようになりました。

「リスクを分散させる」ことで得られるメリットは2つあると考えます。一つは、事故関係者が事故についての「本音」をさらけ出すことができるということです。事故が起きた後、事故被災者は、「なぜこの事故は起きたのか？」という問いに行き着きます。そして、その問いに対する答えを明らかにするために、事故関係者に対して最大限の情報提供を求めていくこととなります。自分だけでなく、家族の人生までも大きく変えることに繋がった事故・・・

その情報を一つでも多く求めることは、事故被災者にとって当然の行動だと言えます。

しかし、事故関係者にとってこの情報提供には非常に難しい課題があります。事故に関わる人間のみで事故調査を行なうことは、それまでの関係性が強く影響してしまうため、客観的な調査は困難となります。また、当該事故が不可避的なものであっても、責任の所在が曖昧な状態で情報をすべて提供してしまうことは、「後に自分たちが責任を問われてしまうのでは」という危機感が様々な憶測を呼び、事故関係者からの情報提供にストップがかかることも考えられます。責任の所在が明らかとなっていないことで、事故被災者、事故関係者双方にとって「望まない現状」を生じさせることとなります。

つまり、「リスクを分散させる」という形で責任の所在を明らかにすることができれば、この誰にも「望まれない現状」を打開することができるというのが一つ目のメリットです。具体的には、自分たちの言動や提供する情報の内容によって、責任の所在が左右されないことを確約されていることによって、事故関係者を「自分たちが責任を問われてしまうのでは」という危機感から解放することができます。そうすることで、事故調査を行なった際に、事故に至

るまでの経緯や事故発生に関する詳細についての「本音」を、事故関係者から聞き取ることが可能となります。その「本音」を含む情報こそが、事故被災者が望む一番のものであり、原因究明をめぐるスポーツ紛争に発展させない一助となると考えます。また、その情報から抽出される事故原因の詳細は、再発防止策を検討するうえで不可欠なものとなります。事故に関する詳細を把握できることは、事故後の紛争を軽減し、同様の事故を防止する好循環を生み出すことになるということです。

「リスクを分散させる」ことのもう一つのメリット、それはスポーツにおける「不可避的」な事故の存在を社会に定着させていくことだと考えます。

人間がこの社会で生きていくうえでリスクはあらゆるところに存在しています。車を走らせれば事故が起こるリスクがあるのと同様に、スポーツをすれば事故が起きるリスクがあることは誰もが認知していることです。ラグビーのようなコンタクトスポーツであれば、なおさらのことです。

しかし、その事実を見えにくくさせている価値観が社会に根強く残っていると感じています。これはあくまで私自身の仮説の域を超えるものではありませんが、日本ではこれまでスポーツ事故について十分な議論がなされてこなかったことが要因の一つではないかと考えます。

この研究は、担当教員をはじめ、多くの方々にご協力いただきながら進めることができます。そして、この研究によって、私は補償制度の再考や法的責任の在り方を検討していくことで、日本におけるスポーツ事故対応の議論を喚起し、スポーツ、とりわけラグビーのようなコンタクトスポーツにおいて、一定の割合で発生する「不可避的」な事故の存在を社会的認知の観点から定着させていきたいと考えます。そして、その基盤が整って初めて、一定の割合で発生する「不可避的」な事故の存在とスポーツ界とが正面から向き合うことができると。

もちろん、この「リスクを分散させる」仕組みを取り入れていくことがすべてを解決に導いてくれるわけではありません。明らかに故意に事故を起こした悪質な指導者を野放しにしてしまうことや、事故に対して疑念を持った事故被災者の思いを晴らす場が失われてしまうことなどの課題も多く残されています。多くの事故被災者の方々と繋がりを持ち、「リスクを分散させる」仕組みにどのような付加的要素が必要であるのか。今もなお事故の後遺症に苦しむ事故被災者や大切な人を失った現実と葛藤している家族にどのような理解を求めていくことが必要であるのか。その課題と私自身が正面から向き合うことも必要であると感じています。